

ふるさと 見て歩き

第81回

水戸三十三観音札所 慈眼寺

水戸三十三観音札所は、馬頭（栃木県那珂川町）を含む水戸藩領の寺院三十三カ寺を選定したものです。これらを巡礼することが江戸時代に庶民の娯楽として広まりました。三十三カ寺のうち、現在までに十九カ寺が廃寺となっています。

今回は水戸三十三観音札所のうち、常陸大宮市域のもう一つの札所、三美の慈眼寺についてご紹介します。

慈眼寺跡は三美公民館の北約500mの山腹にあります。東には谷を隔てて鹿島神社が位置し、南は三美の集落を見渡し、さらに南には那珂川が流れています。

圓通山慈眼寺は、永禄元年（1558）に僧玖岩が開いたとされます。寛文3年（1663）の記録では、額田の麟勝院の末寺となっていて、113人の檀家を抱える寺でした（『開基帳』）。

しかし、天保14年（1843）、徳川斉昭の進めた寺院整理によって廃寺となりました。



▲慈眼寺への参道

慈眼寺の跡地は現在、墓地となっています。ここには江戸時代前半のものをはじめ、多くの石造物があり、古くからの墓域であったことがわかります。

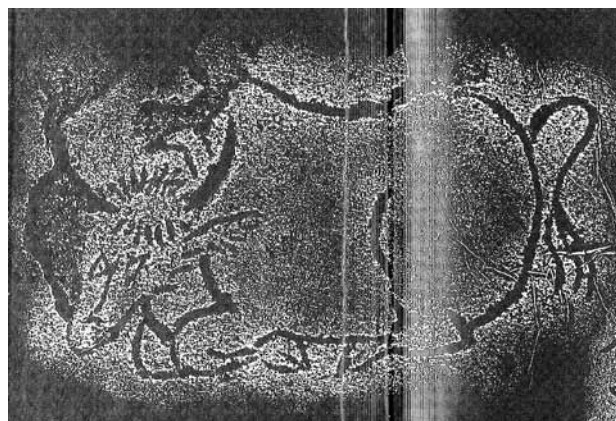
写真の石灯籠は、後世に他の部材も加えられ、原形をとどめていませんが、市内で確認される最古の石灯籠です。元禄13年（1700）という刻銘があり、竹を模した支柱には、節目と葉が彫り込まれています。



▲竹を模した石灯籠

定形化された石灯籠が多い中で、趣向を凝らした大変珍しいものです。

また、慈眼寺跡から西へ500m、御前山方面へ向かう県道の左手に長者伝説にまつわる「牛石」と呼ばれる石造物があります。牛石は、富を蓄えるために牛を酷使して死なせた長者が、牛の死後、供養塔を建てたものといわれています。この牛石はもとも慈眼寺の標石として参道に置かれていたもので、石の表面に「当国三十二番札所 三美村 慈眼寺」と彫られています。裏面には「牛銀之牛石 人足十四人 福島村二成申候」という文言とともに牛の絵が線刻されています。「福島村」とは、三美（さび）村の語呂が良くないということで明和元年（1764）に改名した村名です。その後、天保13年（1842）再び「三美（みよし）村」に戻されました。



▲牛石の線刻（拓本）

このほか、慈眼寺跡には、元禄16年（1703）の石造地蔵や元禄12年（1699）の念仏塔など、江戸時代前半の石造物が多く見られます。

▼慈眼寺の位置（1:25000）



歴史民俗資料館大宮館 ☎52-1450